

2016. 10. 26 (水)

ことばの力

寺 沢 拓 敬

二重の意味「ことばのちから」

今日私がお話するのは「ことばの力」についてです。この言葉を聞いてどのようなものが頭に浮かぶでしょうか。

チャペルアワーですから、多くの人は、言葉の影響力のことかなあとと思うかもしれません。これが、聖書における用法ですから、ある言葉を使うことによって、その言葉が力となって、他人をいい意味でも悪い意味でも動かすことができる、場合によっては社会を変えてしまう、そういう意味です。

ただ、今日私がお話するのは、もう一つ別の意味の「言葉の力」です。それが、言語能力という意味の「ことばのちから」です。たとえば英語力とか外国語能力とか国語力が典型的な例ですが、最近では日本人であっても日本語力が高い人・低い人がいるとか、就活ではコミュニケーション能力が重視されるとか、色々言われています。

私の専門は言語社会学です。「言語能力が社会のなかでどう扱われているか」ということも研究テーマのひとつです。今日はこの点に関してお話ししたいと思います。

私的財としての言語能力

みなさん既に知っているとおり、私たちは言語能力から多大な利益を得ることができません。利益を生むという点で、言語能力は一つの財です。財——goods——は経済学の用語で、ここでは「人が欲しがるもの・必要とするモノ」くらいに理解しておけばいいと思います。言語能力も、それ自体が利益を生むので、財のひとつということになります。

ここで考えてほしいのは、言語能力はどういうタイプの財かということです。比喩で考えてみましょう。言語能力はどういう財に似ているでしょうか。

ひとつの考え方は、「言語能力はマイカーのようなものだ」というものです。大きなコストを払ってマイカーをゲットします。苦勞してマイカーを手に入れば、行きたいところにいつでもすぐに行けます。バスや電車を待つ必要はありません。険しい山道でもまったく疲れません。つまり、苦勞して車を手に入れたことによって、車を持っていない人には不可能な貴重な利益を得ることができるわけです。

「言語能力はマイカーのようなものだ」という比喩は何を意味しているでしょうか。言語能力を苦勞して身につければ、身につけて

いない人に差をつけられる、身につけていない人にはゲットできない貴重な利益を得られる、そういう意味です。

経済学ではマイカーのような財を「私的財」と呼びます。つまり、先程の比喩は、言語能力を私的財と見なす考えかたです。

多くの人はこの「言語能力は私的財」という考え方をごく自然なものだと思ってしまう。「何を当たり前のことを言ってるんだ」と思う人もいるかもしれません。実際、「グローバル社会で生き残るには英語力が大事だ!」「就活には日本語力が評価される」「コミュニケーション能力がないと社会でやっていけない」とか、言語能力について様々なことが言われていまして、それらはすべて「私的財」としての言語能力について言っています。ですから、私たちが「言語能力は私的財」だと信じ込んでしまうのも無理のないことでもあります。

公共財としての言語能力

しかしながら、まったく別の見方もあります。それは、私的財の反対、「公共財」(public goods) とする見方です。実は、言語能力は、基本的なコミュニケーションの次元では紛れもなく公共財です。簡単に言えば、言語能力を持つ人が増えれば増えるほどみんなの利益が増える、ある人が言語能力を身に付けるとその人だけが得をするのではなく、その他の人にも利益が生まれる、そういったタイプの財です。

極端な例で考えてみましょう。私が、ものすごく素晴らしい言語を発明しました。仮に「ホゲホゲ語」としておきましょう。習得が1ヶ月しかかかりません。しかも、非常に論

理的かつ効率的にメッセージが送れます。

しかし、こんな素晴らしい言語なのに学びたいと思う人はゼロです。なぜだかわかりますか?なぜなら話者は私一人しかいないからです。私と情報をやり取りするためだけに、わざわざ学ぼうとする人はいないでしょう。

この時、私がホゲホゲ語能力から受け取る利益はゼロです。たとえ世界一「ホゲホゲ語」が上手でもその言語能力からは何の価値も生まれない。

しかし、新たにホゲホゲ語をマスターしたという変わり者がひとり現れたとしましょう。するとたんに状況が変わります。私はその人と情報のやりとりができるようになります。これは利益です。

話者数が1から2に変わったので、価値は2倍になったと思うかもしれませんが、実は、0から1に増えたということなので質的にまったく異なる進化をしたということになります。そして、マスターした人が3人、4人と増えていくと、価値は3倍、4倍ではなく、もっと爆発的に増えていきます。その結果、誰かが新たにマスターするとそれだけ私も得をします。

つまり、「ホゲホゲ語」の言語能力を新たにゲットした人だけに利益が生まれるのではなく、それ以外の人にも大きな利益を与えてくれる。これが公共財としての言語能力です。経済学の用語で言えば「ネットワーク外部性」を持つということで、ある人が言語能力をゲットすると、その人だけではなく他のみんなもメリットを得るということです。

言語能力を序列づけているのは「制度」のせい

本来、言語能力は、公共財です。平たく言えば「みんなのもの」です。誰かがマスターすればみんなが得をする。

しかし、現代社会ではそういう風には受け止められません。たとえば、誰かが英語をマスターすればマスターしたその人だけが得をする。英語をマスターしてない人は、ライバルに差をつけられてしまったので、損をする。こういう状況が当然だと思われています。私たちがなぜこういう「弱肉強食」的な見方で言語能力を考えてしまうかということ、社会制度のせいです。制度が、私たちがそういう風に信じるようにしむけているわけです。そして、「言語能力は私的財だ」という考え方に疑いを差し挟めなくなってしまう。

たとえば、国語がよくできる人と苦手な人がいたとします。私達が慣れ親しんだ構図では、国語力が高い人が「勝ち組」、低い人が「負け組」ということになります。たとえば国語力が高い人のほうが新聞や週刊誌記事をたくさん読んで「おいしい話」にアクセスできて儲けられるとか、ウソの情報におどされないので損をしないとか、そういう意味で勝ち組だというわけです。これは典型的な言語能力は私的財、要は「自分だけのもの」という考え方です。

しかし、国語がよくできる人は、高い国語力で得た良い情報を、他の人にも教えてあげられるはずで、これがまさに「国語力はみんなのもの」という考え方です。

英語力についても同じことが言えます。英語がよくできるようになった人は、いい仕事に就くとか海外の正確な情報にアクセスでき

ると色々「個人的」な利益を得られると思いますが、それだけでなく、英語メディアを通じて得た情報を英語ができない人にも教えてあげるといった「公共的な使い方」もできるはずで、

ですが、こういう「公共財としての言語能力」ということを言う人はあまりいません。逆に、教育とか就活の文脈では、ライバルに差をつけるために言語能力を磨きなさい、という人がたくさんいます。そういった語り方が蔓延しているために、私たちは言語能力の公共財としての性質を忘れてしまいがちになっているのだと思います。

さいごに——アウシュビッツから生き延びた女性の誓い

今日は「言葉の力」について、その公共性の面に注目してお話しました。最後に、言語の公共性の面についてひとつのエピソードを紹介して終わりたいと思います。

このエピソードは、ベンジャミン・ザンダーさん (Benjamin Zander) という音楽家・指揮者が TED のスピーチの中で紹介していたものですので知っている方もいるかもしれませんが、第二次世界大戦中、アウシュビッツの強制収容所から生き延びた女性から彼が聞いた話とのことです。

舞台は、アウシュビッツに向かっている電車の中です。

すし詰めの列車の中にその女性と彼女の弟がいました。お姉さんが15歳、弟は8歳でした。両親は亡くなっていたのでもういません。二人っきりです。

混み合った列車の中で弟は履いていた靴をなくしてしまいます。8歳の男の子ということを考えれば無理もないかもしれませんが、靴

をだらしなく履いて、そのまま脱げてしまうなんてことはよくあることでしょう。

弟は「お姉ちゃん、靴がどっかに行っちゃった」などと言ったのかもしれませんが。ただでさえすし詰めの満員列車のなかなので余計イライラしたんでしょうか。彼女は弟を厳しくしかります。「どうしてちゃんとできないの、なんて馬鹿なのあんたは」

「なんて馬鹿なの、あんたは」——残念ながら、この言葉が、弟と交わした最後の言葉

になってしまったそうです。弟は強制収容所から戻ることはありませんでした。

アウシュビッツから生き延びた彼女はこの最後の言葉にとても後悔しました。そして誓いを立てます。最後の言葉になったら困るような発言はもう二度としない、と。

言葉の力は自分だけのものではなく、他の誰かのものでもあります。この女性の誓いはこのことをよく示していると思います。

(社会学部助教)